お彼岸（彼岸会）

毎年春分・秋分の日を中心に勤修される法要。日本で始まった仏教行事といわれる。「彼岸」とは生死を超えたさとりの世界である浄土のことで、浄土真宗では浄土に思いをはせ、仏徳讃嘆・仏恩報謝の思いを新たにする法要とされる。

森川　好華
阿弥陀さまのおはたらき～おばあちゃんのお念仏～……1
朝倉　行宣
仏教は誰のために？……11
加藤　真悟
幸せとは何なのでしょう？……21
北塔　光昇
浄土真宗と秋彼岸……31

本文中、『註釈版聖典』の引用は「第二版」を用いています。
表紙絵・挿絵／森長　あやみ

阿弥陀さまのおはたらき～おばあちゃんのお念仏～

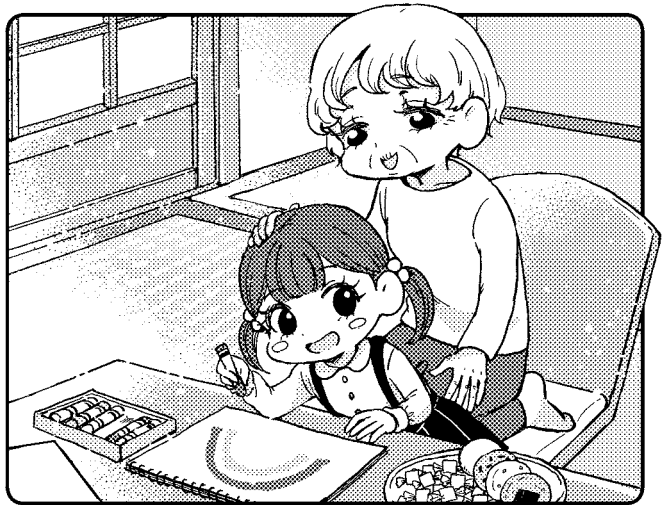
森川　好華

お彼岸が近づく頃、河川敷には彼岸花がたくさん咲き始めます。鮮やかな赤い色はとても印象深く、「ああ、今年もお彼岸がきたなあ」と実感いたします。

ご門徒の皆さまと一緒にお彼岸のお勤めをして、そのあとお話をしていると、たびたび先立たれた方のことを聞かせていただきます。

「お父さん昔はね…、このお菓子が大好きでね」

「母にはよう怒られたもんです」



「また会いたい」「話をしたいなあ」など、皆さまそれぞれに思い出される方がおられます。そんなお話を聞いたとき、私はよく祖母のことを思い出します。

私は九州の小さな温泉街のお寺で育ちました。とにかく〝おばあちゃんこ〟だった私は、いつも「おばあちゃん、おばあちゃん」と祖母にくっついていました。

法要が勤まる時は「ちゃんとご本堂に座ってお参りせんば」と祖母に言われ、隣に座ってお参りをしました。すると「えらかね〜」と、とにかく褒(ほ)めてもらえるのです。それが嬉しくて嬉しくて。褒められるために座っていたようなところもありました。小学生になってからも学校から帰ると自分の部屋には戻らず、祖母の部屋でおやつを食べたり絵を描いたり…。祖母と一緒にいることが多かったのです。とても大好きなおばあちゃんでした。

しかし、私が高校生になった頃から、祖母はよく物忘れをするようになりました。ある日、朝ご飯を食べてしばらくすると「このちゃん、朝ご飯はまだね?」と言うのです。「さっき食べたよ?」と言うと「そうやったかねぇ」と首を傾げながら部屋へ戻るのです。またしばらくすると戻ってきて、「このちゃん、朝ご飯はまだね?」と言うのです。

こういうことが多くなりましたので、診察をしてもらったところ、病気からの症状だということがわかりました。

日に日に症状は進みました。やがて私の顔を見て「どこのお嬢さんやろうか〜」、息子である父の顔を見ても「どのご院家さんかな」と首をかしげるようになりました。

私が知っている祖母は、とても優しく、仕事もバリバリとこなす、かっこいいおばあちゃんでした。けれど目の前にいる祖母は、以前とは全く違っていました。

「どうして？　あんなにかっこよかったおばあちゃんだったのに、私のこともわからないようになってしまって…」

そのことが何より悲しく、なんだかとても悔しい思いでいっぱいでした。

私自身も人間として生まれてきたからには、老いて死ぬことは避けられません。病気になるかもしれませんし、思いもよらないことでいのちを終えていかねばならないかもしれません。そのことは何度も何度も聞かせていただいてわかっていたはずです。けれどもつい、私は大丈夫、元気でいられるものだと思ってしまいます。「今日より若い日はない」という言葉があります。全くその通りで、日々刻々と老いていく、死を逃れることのできない、私ではどうすることもできないこの身があるわけです。祖母の姿に、私は自分自身の姿を考えさせられるようになりました。

さまざまなことを忘れていった祖母ですが、毎朝晩、必ず本堂にはお